現代行動科学会誌　第15号，１－８（1999）

【論文】

主観的充実感とビッグ・ファイブ

堀毛　一也＊

１．問題

パーソナリティ研究における「人間－状況論争（person-situation debate)」がもたらした研究動向のひとつとして、ビッグ・ファイブ（特性５因子論）研究を中心とする特性論的立場の復権があげられよう。こうした立場に立つ研究は、人々が日常他者の性格記述に用いる用語の分析や、特性もしくは関連する行動の因子分析結果が、通文化的、通年代的に５因子に収束されることを根拠に、特性概念がパーソナリティの説明因として有効に機能することを繰り返し主張している。このような研究動向が、人間－状況論争で問題となった現実場面での行動の予測性を高め、論争の解決につながるか否かに関しては、なお一層論議を重ねる必要があるが、少なくともパーソナリティ概念を再整理・構築してゆくための基盤となる考え方のひとつとして、重要な役割を果たしつつあることは事実であろう。

ビッグ・ファイブ研究のもうひとつの大きな貢献は、特性概念の根拠となる生物学的、神経・生理学的側面を探求する研究の活性化をもたらしたことであろう。パーソナリティに関する進化論的アプローチや行動遺伝学的なアプローチは、ビッグ・ファイブ研究と連携をとりながら、個人差がもたらされる根源のひとつとして、個人の遺伝的な特徴が、従来考えられてきたよりも大きな規定因として、個々の資質の相違に関与している可能性を示唆している。たとえば、Loehlin(1992)は行動遺伝学的な手法に基づく共分散構造分析により、ビッグファイブの遺伝率[注1]を推定している。Jang ら(1996)によれば、この比率はさらに高いとされている（表１）。また、Zuckerman(1991)は、特性上の相違の基盤に、神経生理学的なメカニズムの個人差があることを主張しているが、こうした神経生理学的なアプローチによって個人の気質の相違を探ろうとする研究も、不安やストレス研究を中心に急増している。

こうした研究の一端として、Tellegen ら(1988)は、別々に育てられた一卵性の双子でも、一緒に育てられた一卵性の双子と同程度に、しかも二卵性双子よりもはるかに高い、パーソナリティの類似性がみられることを明らかにしている。さらに Tellegen らによれば、こうした遺伝的な類似性は、情緒的な側面にも当てはまることが指摘されている。日常生活の中で示される情緒的な特質とパーソナリティの関連は、これまでにもさまざまな形で論議されてきたが、Tellegen らの研究は、こうした情緒的な特質の背景にも遺伝的な傾向性があることを示唆している。

＊岩手大学人文社会科学部

人々のもつ比較的安定した情緒的な特質に関する研究の中で、最近注目を集めているもののひとつに「幸福感（happiness)」あるいは「充実感（well-being）」がある。幸福感や充実感は、情緒的な個人差の中でもとりわけ重要な側面と考えることができよう。人はだれでも幸福で充実した人生を送りたいと考える。日頃自分が幸せであると感じながら人生を送る場合と、不幸せを感じながら過ごす場合とでは、単純に比較はできないものの、自分の人生に関する意味づけに大きな相違が生じるものと思われる。Wilson(1967)は、幸福感や満足感に関する研究の展望から、「幸福な人々（happy person)とは、若く、健康で、よい教育を受け、経済的に豊かで、外向的で楽観主義的であり、心配事が少なく、敬虔で、自尊感情を満足させる結婚をしており、仕事のモラールも高く、性や広範囲な知識の獲得について適度な関心をもつ人々である」としている。こうした特徴は、今日のわれわれの幸福感にもそのまま通用すると考えられよう。

Tellegen らは、幸福感や充実感も遺伝的に規定される可能性が大きいことを示している。一方で Argyle(1987)の社会心理学的アプローチをはじめ、さまざまな研究により、人々の幸福感には社会経済的要因を始め、環境的要因も重要な役割を果たすことが指摘されている。最近のパーソナリティや社会心理学的研究では、こうした観点を統合しつつ、目標論・動機論的なアプローチを中心に、幸福感も含めた「人々が自分の人生に対してもつ評価的な反応（Diener & Diener, 1995)」を「主観的充実感(subjective well-being : SWB)」と呼び、情緒的な個人差を示す主要な指標のひとつとしてとらえようとする動向が盛んになっている[注2]。主観的充実感をどのような指標によってとらえるかについてもさまざまな論議があるが、ここでは Emmons(1986 ; 1999)による考え方をとりあげる。Emmons(1999)によれば、主観的充実感は、情緒的な幸福感と認知的な満足感から構成される。情緒的な幸福感は、陽性感情（positive affects)の高さと陰性感情（negative affects)の低さからなる。これら２つの側面は、互いに相関するものの、別個の次元としてとらえられている（Watson & Tellegen, 1985)。一方、認知的な満足感は、人生満足感（life satisfaction)などにみられる人生そのものへの総体的な評価とされ、情緒的な幸福感と相関はあるが異なる側面とみなされている。

主観的充実感の構成要素がこのような多次元性をもつとすると、背景をなす可能性のある神経生理学的側面も含め、ビッグ・ファイブに示される特性との関連についても、充実感の側面ごとに相違がみられる可能性がある。この点に関してはすでに、Costa & McCrae(1980)により、陽性感情は外向性次元（E）と正の相関、陰性感情は情緒安定性次元（N）と負の相関をもつことが示されている。さらに McCrae & Costa(1991)は、人生満足感が誠実性（C）と正の相関をもつことも示している（表２）。

McCrae らの研究は、20 代から 80 代を対象とした縦断的な研究で、知見の信頼性も高いと考えられるが、一方で年代や性により主観的充実感とビッグ・ファイブの関連がどのように変化するかに関する吟味は十分に行われていない。また、先述したように、ビッグ・ファイブについては通文化的・通年代的であることが数多くの研究により示されているが、主観的充実感に関しては文化差がみられることも指摘されている。たとえば、Diener & Diener(1995)は、31 カ国の学生のデータをもとに人生満足感と自尊心などとの関連性を検討し、両者の相関が文化によって異なること、また個人主義的な文化のもとでは相関がより高くなることなどを明らかにしている。このような文化差が現実に存在するとす

れば、主観的充実感とビッグ・ファイブとの関連性も、本邦では異なる結果になる可能性もある。

以上の論議をもとに、本研究では、主観的充実感とビッグ・ファイブの関連を年代別・性別に検討するとともに、McCrae & Costa(1991)の知見との比較により、文化差についても検討を行うことを目的とした調査研究について報告する。

2．方法

東北地方のA大学に通う学生約 400 名に、授業時間内に、帰省の機会を利用して、親、親族、知人など該当する年代の既婚夫婦1組を対象とする調査を依頼した。その際、出席番号の末尾により 20 代から 60 代までの年代を指定し、夫婦どちらかが該当する年代にあてはまることを条件とした。また、調査は無記名であること、夫婦双方に個別に回答を依頼すること、回答のさいにはプライバシーの保護に留意すること、回収は原則として郵送により、差出人表記は不要であることを教示・徹底した。結果的に 20 代から 60 代まで合計 465 名（男性 239 名、女性 226 名）の有効回答を得た。対象者の性別・年代別の人数は表3に示した(注3)。質問紙は「人生のテーマに関する意識調査」と銘打たれており、12 頁からなる複合的な目的をもった調査となっている。このうち今回の分析に用いたデータは以下の通りである。1）本人のパーソナリティ評定：柏木ら（1993）を参考に、予備的検討を経て、ビッグ・ファイブの各因子につき4つの形容詞を抽出した。これらの形容詞を用いた単極尺度（5：よくあてはまる～1：まったくあてはまらない）により自分自身のパーソナリティ（「あなたの性格」という聞き方をした）を5段階で評定させた。2）主観的充実感指標：a）陽性感情：幸福な感じ、楽しい感じ、うれしい感じ、自信のある感じ、充実した感じという5項目について、それぞれ「いつもそのような気分でいる－そのような気分でいることはほどんどない」の5段階で評定を求めた。b）陰性感情：ものたりない感じ・落ち込んだ感じ・いらいらする感じ・不安な感じ・悲しい感じという5項目について、陽性感情と同様の5段階で評定を求めた。c）人生満足感：人生や生き方、夫婦関係、家族関係、友人関係の4側面に関する満足感を、それぞれ「満足できる－満足できない」を両極とする7段階尺度で評定を求めた。d）人生期待感：人生満足感と同じ4側面に関する今後の期待感を、「期待がもてる－期待がもてない」を両極とする7段階で評定を求めた。このうち期待感は、現状に関する満足感だけでなく、将来への期待も充実感の重要な側面と考え、評定項目として取り入れることにした。

3．結果

<u>パーソナリティ評定の因子分析</u>：パーソナリティ評定結果は性別・年代別に3－7因子で因子分析（主因子法バリマックス回転：以下同様）を行った。その結果、性・年代にかかわらず5因子構造がほぼ妥当であると判断されたため、性・年代をこみにした分析をおこなった。結果は表4に示すとおり、ビッグ・ファイブに対応する5因子が得られている。そこで各因子に負荷の高かった3項目（表中実線を付した項目）について、得点が高いほど外向性、開放性、情緒安定性、誠実性、同調性が強くなることを示すように必要に

表１：ビッグ・ファイブの遺伝率

	E	O	N	C	A
Loehlin,1992	.36	.46	.31	.28	.28
Jang,et al.,1996	.53	.61	.41	.44	.41

表２：SWB とﾋﾞｯｸﾞ・ﾌｧｲﾌﾞの相関(McCrae & Costa,1991 より作成)

	E	O	N	C	A
陽性感情　1979	.32**	.14**	-.09	.13**	.15**
陽性感情　1981	.24**	.14**	-.12*	.12*	.10*
陰性感情　1979	-.06	.08	.40**	-.17*	-.12*
陰性感情　1981	-.09	.13*	.42**	-.24**	-.11**
人生満足感 1979	.19**	.01	-.29**	.25**	.16**
人生満足感 1981	.22**	-.05	-.37**	.24*	.12**

表３：調査人数

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	合計
男性	32	38	62	80	27	239
女性	33	34	91	53	15	226

表４：パーソナリティ評定の因子分析結果

	fac1	fac2	fac3	fac4	fac5	com
活動的	.64	.32	-.09	-.05	.02	.53
人の良い	.21	.15	.12	-.12	.45	.30
機転のきく	.25	.65	.02	-.15	.10	.52
心配性	-.02	.05	.67	-.12	.01	.46
いいかげんな	-.01	-.01	-.11	.72	-.02	.53
外向的	.80	.19	-.10	.03	.10	.70
自己中心的	.15	.17	.12	.47	-.26	.35
洞察力のある	-.06	.63	.02	-.14	.12	.44
動揺しやすい	.01	-.18	.73	.17	-.02	.59
責任感のある	.19	.36	.15	-.40	.30	.44
引っ込み思案	-.45	-.05	.41	.12	.07	.40
温和な	-.06	.06	-.02	-.10	.65	.43
不器用な	-.14	-.25	.11	.42	.11	.28
くよくよしない	.19	.13	-.35	.19	.23	.26
軽率な	.10	-.23	-.02	.55	-.04	.36
話し好き	.55	.07	.07	.06	.15	.34
寛大な	.14	.17	-.13	.01	.58	.40
呑み込みの早い	.25	.57	-.05	-.01	.17	.42
神経質	-.02	.21	.61	-.05	-.01	.42
勤勉な	.11	.27	.09	.34	.15	.23
寄与率（%）	19.6	12.7	9.9	7.9	6.0	56.0
解　釈	E	O	N	C	A	

表５：ﾋﾞｯｸﾞ・ﾌｧｲﾌﾞの平均・ＳＤ

	平均	ＳＤ
外向性（男）	3.35	0.81
（女）	3.45	0.77
開放性（男）	3.58	0.73
（女）	3.36	0.66
情安性（男）	2.58	0.77
（女）	2.54	0.82
誠実性（男）	3.61	0.72
（女）	3.64	0.67
同調性（男）	3.80	0.60
（女）	3.74	0.57

注）いずれも５段階尺度

表６：主観的充実感の平均・ＳＤ

	平均	ＳＤ
陽性感情（男）	3.43	0.60
（女）	3.40	0.61
陰性感情（男）	3.51	0.67
（女）	3.57	0.71
人生満足感（男）	3.41	0.90
（女）	3.36	0.93
人生期待感（男）	3.26	0.98
（女）	3.19	0.96

注）陽性・陰性感情は５段階尺度
満足感・期待感は７段階尺度
を５段階尺度に修正

表７：主観的充実感とﾋﾞｯｸﾞ・ﾌｧｲﾌﾞの相関（全体）

全体	E	O	N	C	A
陽性感情	.42**	.39**	.11*	.19**	.41**
非陰性感情	.14*	.13*	.28**	.22**	.22**
人生満足感	.28**	.26**	.07	.17*	.26**
人生期待感	.26**	.27**	.11*	.13*	.29**

注）**は 1%、*は 5%で有意なことを示す

表８：主観的充実感に関する階層的重回帰分析結果（全体）

全体	年代	R^2	F	年代	E	O	N	C	A	ΔR^2	R^2	F
陽性感情					.27**	.19**	.12**	.07	.28**		.33	44.0**
陰性感情	.10	.01	4.7*		.08		.31**	.25**	.17**	.19**	.20	19.3**
人生満足感	.12	.02	7.1**	.08	.19**	.10*	.08		.17**	.14**	.15	13.4**
人生期待感					.15**	.14**	.12**	.08	.21**		.16	17.4**

注）Ｆは重回帰式の有意性を示す（**は 1%、*は 5%で有意）。 年代およびＥ～Ａ欄の数値は各式における標準偏回帰係数の値を示す（**は 1%、*は 5%の有意性、数値のみの無印は 10%の有意傾向を示す）。
ΔR^2 は追加変数による決定係数の増分とその有意性を示す（**は 1%で有意）。

応じて尺度得点を逆転したうえで合計得点を求め、項目数で割った平均得点を個々のパーソナリティ得点とした。それぞれの平均得点と標準偏差を表５に示す。尺度の信頼性係数（α）は、外向性=.72、開放性=.70、情緒安定性=.69、誠実性=.57、同調性=.58 となった。誠実・同調の２因子ではやや低い数値となったが、.60 に近い数値が得られているので問題はないと判断した。また各因子の得点について、性および年代を要因とする２要因の分散分析により差を検定した結果,開放性では性の主効果（F=7.51,df=1,450,p<.006)、誠実性では年齢の主効果（F=10.82,df=4,450,p<.001)が有意となった。多重比較の結果、開放性は女性より男性のほうが高くなり、誠実性は年代があがるほど高くなることが明らかになった。それ以外には主効果・交互作用とも有意な相違はみられなかった。

主観的充実感指標の分析：陽性感情と陰性感情はまとめてひとつの質問の中で回答を求めたので、あわせて性・年代をこみにした因子分析を行った。その結果、２因子構造が採用され、それぞれ陽性感情を示す５項目、陰性感情を示す５項目が因子として抽出された。陽性感情項目間の相関は.25 ～.66、陰性感情項目間の相関は.37 ～.54 であった。この結果から、陽性感情についてはそのまま、陰性感情については得点を逆転し（以下非陰性感情と呼称する）、それぞれ５項目の平均得点を求め主観的充実感の指標とした。人生満足感、人生期待感については、回答に正の方向への偏りがみられたので、満足できない・期待がもてないとする評価得点（1-3）を同一カテゴリとし、５段階評価に修正したうえで、性・年代をこみにした因子分析を行った。その結果、１因子構造が確認された[注4)]。人生満足感の４側面間の相関は.35 ～.70、人生期待感の４側面間の相関は.51 ～.72 であった。この結果から、４側面の平均得点を満足感、期待感それぞれの指標として採用することにした。α係数は陽性感情=.82、陰性感情=.80、人生満足感=.81、人生期待感=.87 と、いずれも高い値を示した。それぞれの平均得点と標準偏差を表６に示す。これらの４指標について、性と年代を要因とする分散分析を行った。その結果、人生満足感については年代の主効果が有意となった（F=2.92,df=4,437,p<.02)。また、非陰性感情についても年代の主効果に有意な傾向差がみられた(F=1.99,df4,437,p<.10)。多重比較の結果、人生満足感は年代とともに上昇することが明らかになったが、非陰性感情については明確な差は認められなかった。また他の２指標では、主効果・交互作用とも有意差はみられなかった。

主観的充実感とビッグ・ファイブの関連性：性・年代をこみにした主観的充実感とビッグ・ファイブの相関を表７に示す。Costa ら（1980)の指摘と同様に、外向性と陽性感情、情緒安定性と非陰性感情の間に正の相関が得られている。また、McCrae ら(1991)の指摘と同様に、人生満足感と誠実性の間にも正の相関が認められているが、その値は低い。一方で同調性や開放性がどの充実感指標ともある程度の相関を示している。

引き続き、主観的充実感の各指標を目的変数にとり、ビッグ・ファイブの５因子を説明変数として重回帰分析を行った。分析は年代による影響を考慮し、年代を一次投入変数、ビッグ・ファイブを二次投入変数とする階層的重回帰分析によって行った。結果を表８に示す。年代の効果は非陰性感情と人生満足感で有意となったが、その影響性はさほど明確ではなかった。双方とも、ビッグ・ファイブ因子を投入することにより、決定係数に明確な増分が認められ、パーソナリティ要因が充実感の有効な説明因となることが示された。陽性感情と人生期待感では、年代は有意な説明因にならず、ビッグ・ファイブのみが有効

な説明因となることが明らかになった。

陽性感情に関しては、外向性のみならず、同調性、開放性、情緒安定性も有効な説明因となっている。非陰性感情についても、情緒安定性の他、誠実性と同調性が有効な説明変数となることが示された。また人生満足感・期待感の予測には、外向性、開放性、同調性が関与していた。一方、誠実性は人生満足感の有効な予測因にならなかった。

最後に、性別・年代別に主観的充実感指標とビッグ・ファイブの相関を求めた。煩雑さを避けるため、年代は若年代（20/30 代）、中年代（40 代）、壮年代（50/60 代）の３群とした。また、ビッグ・ファイブを説明変数とする重回帰分析も行った。結果を表９に示す。全体に若年よりも中・壮年のほうが、相関が高くなる傾向がみられた。特に、男性・壮年では、両者の関連性がとりわけ高かった。説明変数の側からみると、男性：若年では同調性、中年では外向性、壮年では外向性と誠実性が有意な説明因となっている。一方女性では若年では開放性、中・壮年では同調性が有効な説明因となっていた。一方、目的変数である充実感指標からみると、陽性感情については、性・年代をとわず外向性、同調性、開放性との関連が有意になった。その傾向は男性でより顕著であった。これに対し、非陰性感情は、情緒安定性と相関がみられたが、その傾向性は男性よりも女性において顕著であった。男性では情緒安定性よりも誠実性によって非陰性感情が規定される傾向がみられた。人生満足・期待感は、男女ともほぼ同様の傾向を示した。男性：若年では同調性、壮年では外向性や誠実性によって規定され、女性：若年では開放性、中・壮年では開放性とともに外向性や同調性によって規定されることが示された。以上の結果から、主観的充実感とビッグ・ファイブとの関連は、年代や性によって変動する可能性があることも示唆された。

４．考察

本研究の結果は、陽性感情と外向性、非陰性感情と情緒的安定性が相関をもつというMcCrae(1991)らの研究結果を支持した。本研究でもちいたビッグ・ファイブの尺度は形容詞による評定形式によるもので、McCrae らの用いた質問紙形式の尺度とは異なるが、結果にこのような共通性が認められたことは、主観的充実感とビッグ・ファイブの関連性が頑健なもので、遺伝的な背景をベースとした情緒的な個人差につながる可能性のあることを示していると考えることもできる。一方で、今回の結果は、陽性感情や人生満足・期待感が外向性とともに同調性・開放性によって規定されていることを示した。また陰性感情にも誠実性や同調性の影響がみられた。こうした結果は、尺度の相違によるものと見なすことも可能だが、一方で文化的な影響性によるものとする見方もできよう。最近 Kitayama & Markus(in press)は、文化心理学的な視点から、相互独立的な文化と相互協調的な文化では幸福感を規定する様相が異なり、前者では主観的・個人的な幸福感が、後者では対人的に共有された幸福感が重視されるとする考え方を明らかにしている。ビッグ・ファイブ研究でも、同調性や開放性の構成内容には文化差があることも指摘されており、こうした側面を中心に、幸福感につながるパーソナリティ傾向には、文化によって相違があることも充分考えられ、今後重要な研究課題になるものと思われる。

また、今回の結果は、充実感とビッグ・ファイブの関連性が、性や年代によって異なる

表９：性・年代別の主観的充実感とﾋﾞｯｸﾞ・ﾌｧｲﾌﾞの相関および主観的充実感に関する重回帰分析結果

若年：男性	E	O	N	C	A	R^2	F	若年：女性	E	O	N	C	A	R^2	F
陽性感情	.38**	.33**	.04	.04	.48** .48	.23	20.1 ***	陽性感情	.28*	.35** .30	.25*	.12	.30* .24	.18	6.81 **
非陰性感情	-.01	.04	.18	.01	.22	----	----	非陰性感情	.13	.12	.39** .39	.16	.21	.15	11.5 **
人生満足感	.23	.10	.06	-.03	.29* .29	.08	6.1 *	人生満足感	.11	.30* .28	.30* .27	-.03	.15	.16	6.0 **
人生期待感	.24*	.10	.21* .22	-.04	.39** .40	.20	8.4 ***	人生期待感	.14	.25* .25	.12	.01	.15	.06	4.2
中年：男性								中年：女性							
陽性感情	.56** .48	.25	.17	-.04	.40** .28	.38	18.3 ***	陽性感情	.33**	.47** .38	.24* .18	.16	.40** .30	.35	15.1 ***
非陰性感情	.28* .32	-.01	.27*	.39** .43	.10	.26	10.2 ***	非陰性感情	.22*	.31**	.32** .43	.30** .42	.23*	.26	15.32 ***
人生満足感	.24	.05	.03	.22	.05	----	----	人生満足感	.30** .25	.30**	.18	.05	.35** .30	.18	9.3 ***
人生期待感	.37** .37	.27*	.24	.15	.13	.14	9.3 **	人生期待感	.32**	.38** .33	.21*	.26*	.32** .24	.20	11.0 ***
壮年：男性								壮年：女性							
陽性感情	.56** .38	.57** .26	-.09	.33**	.42** .26	.47	29.7 ***	陽性感情	.38** .35	.28*	.12	.29*	.41** .38	.29	12.9 ***
非陰性感情	.21* .18	.19*	.25* .27	.38** .36	.18	.24	10.7 ***	非陰性感情	-.02	.11	.37** .38	-.02	.35** .41	.30	13.8 ***
人生満足感	.39** .32	.33**	-.18	.36** .25	.31** .18	.27	12.35 ***	人生満足感	.33**	.34** .33	.16	.17	.26*	.11	8.1 **
人生期待感	.41** .37	.35**	-.12	.29** .28	.29**	.25	15.61 ***	人生期待感	.05	.31*	.15	.16	.42** .43	.19	14.6 ***

注）主観的充実感の各項目とも、上段は相関係数（**は１％、*は５％水準で有意な相関）、下段は重回帰分析で有意（５％）になった標準偏回帰係数の値を示す。R^2はその決定係数、Ｆは式の有意性を示す（***は 0.1%、**は 1%、*は 5%で有意）

可能性があることも示唆している。おおまかにいえば、男性では、年代とともに規定因が同調性から外向性、誠実性と移行し、女性では、開放性から、外向性、同調性と移行している。こうした変化の説明は、今回のデータのみでは不可能であるが、職業的な役割や世代的な価値観の推移を考慮すると、若年代では、女性が家庭内にとどまらず開放的に活動でき、男性が支える構造をもつことが互いの充実感に繋がるのに対し、中・壮年代では積極的で誠実な生き方を求める男性を女性が支えるという形が満足感につながるということも考えられる。こうした推論の正しさを裏付けるためには、よりインテンシブな調査が必要とされよう。McAdams(1996)は、個人差を理解するための枠組みは、１）気質的特性レベル、２）目標や課題解決の文脈レベル、３）統合的な人生物語レベルに分けられることを指摘している。今回の報告は第１のレベルに属するもので、その意味でも、２）や３）レベルに属するようなインテンシブな研究との重ね合わせが求められることになろう。

【本文脚注】

（注１）遺伝率とは、表現型分散のうち遺伝分散に起因する部分の割合を示す。詳細は Plomin(1990 / 安藤訳,1993) などを参照のこと。

（注２）subjective well-being は主観的幸福感と訳されることも多いが、ここでは、本文中の定義に即した内容をもつ概念として、単なる幸福感との区別を念頭におき、主観的充実感という訳語を用いることにした。

（注３）被験者の学歴、職業、結婚年数、結婚形態、調査者との関係などの属性については堀毛（1995）を参照のこと。

（注４）人生満足感・期待感の１因子構造、陽性・陰性感情の２因子構造は、年代別・性別に検討でもほぼ同一の構造になることを確認している。

（注５）本研究の一部は平成８年度東北心理学会で発表された。

引 用 文 献

Argyle,M. 1987 *The psychology of happiness.* Methuen. 石田梅男（訳） 1994 幸福の心理学　誠信書房

Costa,P.T.Jr. & McCrae,R.R. 1980 Influence of extraversion and neurotism on subjective well-being: Happy and unhappy people. *JPSP*,38,668-672.

Diener,E. & Diener,M. 1995 Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *JPSP*, 68, 4, 653-663.

Emmons,R.A. 1986 Personal strivings: An approach to personality and subjective well-being. *JPSP*, 51,5,1058-1068.

Emmons,R.A. 1999 The psychology of ultimate concerns. Guilford Pr.

堀毛一也 1995 主観的充実感の規定因としての社会的スキルと目標特質　日本社会心理学会第 36 回大会発表論文集,

柏木繁男・和田さゆり・青木孝悦　1993 性格特性の BIG FIVE と日本語版 ACL 項目の斜交因子基本パターン　心理学研究,64,2,153-159.

Kitayama,S. & Markus,H.R.(in press) The pursuit of happiness and the realization of sympathy: Cultural patterns of self,social relations,and well-being. In Diener,E. & Sue,E.(eds.) *Subjective well-being across cultures.* MIT Pr.

Loehlin,J.C. 1992 *Genes and environment in personality development.* Sage.

McAdams,D.P. 1996 Personality,modernity,and the storied self: A contemporary framework for studying persons. *Psy. Inquiry*,7,295-321.

McCrae,R.R. & Costa,P.T.Jr. 1991 Adding Liebe und Arbeit:The full five-factor model and well-being. *PSPB*,17,2,227-232.

Plomin,R. 1990 *Nature and nature: An introduction to human behavioral genetics.* Brooks/Cole.

安藤寿康・大木秀一（共訳） 1994 遺伝と環境－人間行動遺伝学入門　培風館

Tellegen,A.,Lykken,D.T.,Bouchard,T.J.,Wilcox,K.J.,Segal,N.L. & Rich,S. 1988 Personality similarity in twins reared apart and together. *JPSP*,54,6,1031-1039.

Watson,D. & Tellegen,A. 1985 Toward a consensual structure of mood. *Psy. Bull.*,98,219-235.

Wilson,W. 1967 Correlates of avowed happiness. *Psy. Bull.*,67,294-306.

Zuckerman,M. 1991 *Psychobiology of Personality.* Cambridge U.P.